

巡の運命診断室

第一話～第十話

— 算命学鑑定に基づく物語 —

第一話 土の下の春

桜の花弁が、まだ散りきらずにいた。

四月の東京は、冬の名残と春の兆しが奇妙に同居する季節だ。風が吹けば花弁が舞い、止めば湿った空気が肌に触れる。その空気の中を、九条巡は歩いていた。

路地裏の奥深く、古い木造建物の二階。階段を上がったところに、小さな看板がある。墨で書かれた七文字——「九条巡運命診断室」。文字は古びた白い木地に吸い込まれるように沈んでいて、まるで最初からそこにあったかのような佇まいだった。

九条巡、三十六歳。元精神科医。

診察室の奥に据え付けられた古い机の上に、祖母が遺した一冊のノートがある。表紙は紫紺の布地で、手作りされたものだ。何度も何度も開かれたページには、シミや色褪せが目立つ。その横に、新しい万年筆と、月の暦が書かれた薄い手帳。明日の予定欄には「初診 14:00 高橋」と記されている。

巡は椅子に腰を下ろし、細長い指を机の上で組んだ。丙寅の日柱を持つ男。太陽の火。しかし今の巡に、太陽の輝きはない。精神科医として患者の心を開き、言葉で傷を縫い合わせた日々。もっと多くの人を救えると信じて、へき地医療のためのAIプラットフォームを立ち上げた日々。共同創業者の藤堂慧に裏切られ、全てを失った日々。

先が見えないふかいふかい海の底で、実家の蔵から祖母さくらの古い箪笥を見つけた。京都の懐かしい香りと、一冊のノート。表紙には「九条流 運命診断の要」と、祖母の細い字で書かれていた。

そこから、二年をかけて立ち上がった。祖母の理論を自分のものにし、精神医学の知識と重ね合わせ、新しい「運命診断法」として体系化した。

三十六歳で、この路地裏に、小さな診察室を開いた。

* * *

翌日、午後二時。

扉を開く音がした。

高橋美咲は、四月の風に乱れた髪を耳にかけながら、診察室の敷居をまたいだ。二十七歳。広告代理店に七年勤めた女性は、見たところ、疲弊していた。肌は白いが血色がなく、目の周りには薄い影がある。身体は細く、その細さは健康的ではなかつた。枯れた若草のような印象。

巡は立ち上がり、軽く会釈した。

「はじめまして。九条と申します」

「あ——高橋美咲です」

美咲は、そっと椅子に座った。座る動作が、どこか気を遣つたものだった。場の空気を壊さないように、自分の存在を小さくするように。巡はそれを見ながら、心の中で一つ、ノートに書き留めた。

「どのようなきっかけで、ここを？」

「偶然なんです。昼休みに、少し歩いていたら、路地の奥にこの看板が見えて。運命診断室って——なんだろうと思って」

美咲は照れたように微笑んだ。

「看板の文字が、なんだか古くて。でも、どこか温かい感じがして。それで、つい」

巡は頷いた。

「今日は、どのようなご相談でしょう」

「仕事を——辞めるべきか、続けるべきか。それが知りたくて」

「生年月日をお聞きしてもよろしいですか」

「1999年5月3日です」

巡は手帳を開いた。祖母の筆跡を書き写した干支表。1999年5月3日——。

年柱、己卯。月柱、戊辰。日柱、乙卯。

日干は乙。陰の木。若草、蔓草。

巡の目が、命式の構造を読み解いていく。

己——土。戊——土。辰——土。

三つの土が、乙木の上に載っている。重い。あまりに重い。若草の芽が、分厚い土の下に閉じ込められている。

そして貫索星が二つ、司禄星が二つ。頑固で自分を曲げない芯がある。蓄積と継続の才能がある。天禄星が二つで、本来のエネルギーは高い。

——なのに、この女性は枯れかけている。

祖母の声が、よみがえった。

巡が五歳の頃。京都の古い家の裏庭で。さくらが小さな鉢植えを巡に見せた。土がぎゅうぎゅうに詰まった鉢の中で、一本の芽が、かろうじて首をもたげていた。

「巡、見てみ」

さくらの声は、京都弁の柔らかいもので、いつもどこか、遠くの方から聞こえるような気がした。

「この芽、土が重すぎて出てこれへんのや」

「どうしたらいい？」

「土をどけてやるか？ それとも——」

さくらは、如雨露（じょうろ）を持ってきた。

「水をやるんよ。土を柔らかくして、芽が自分で出てこれるようにしてやるんや。それから、お日さんの当たるところに置いたる。そうしたら、芽は自分の力で伸びるんよ」

さくらは微笑んだ。

「種はな、どんなに重い土の下にいても、死んでへん。水と光さえあれば、必ず芽を出す。巡、覚えときや。人間もおんなじやで」

巡は目を開いた。

「美咲さん」

彼女が顔を上げた。

「あなたの日干は乙木。陰の木です。若草、蔓草——柔らかくしなやかで、どんな環境にも適応しようとする力を持った木です。それがあなたの本質です」

美咲が、微かに頷いた。

「そして、あなたの命式を見ると——五行のバランスの中で、土が三つもあります。巳、戌、辰。三つの土が、あなたの乙木の上に載っています。土は本来、草を育てる養分です。しかし多すぎれば、芽を押さえつけてしまう」

巡は、美咲の両手を見た。爪は短く切られ、指先にはペンだこがある。広告代理店の七年間。数字に追われ、上司の「数字が全て」という言葉に押し潰されてきた七年間。

「ですが、あなたの問題は、辞めるか続けるかという二択にはありません」

「え？」

「あなたが今感じている限界は、土が重すぎるという信号です。あなたの乙木は死んでいません。貫索星が二つ。自分の芯を持ち

続ける力です。司禄星も二つ。地道に積み上げる才能。天禄星もふたつで、本来のエネルギーは高い。あなたは弱い人ではない」
美咲の目が、揺れた。

「大事なのは、辞めるか続けるかではなく、あなたの土を柔らかくする水と、芽を伸ばす光を見つけることです。あなたを理解してくれる人間関係。自然体でいられる環境。それが水と光です」

美咲の目から、涙がこぼれた。
「わたし——誰にも相談していなくて。ずっと一人で、仕事だけしてて」

沈黙が、診察室を満たした。
「在り方を、変えてみてください」

巡は静かに言った。
「辞めるか続けるかは、結果です。まず、あなた自身の在り方を変える。土を柔らかくする水を見つけ、光の当たる場所に自分を置く。そうすれば、芽はちゃんと伸びます」

美咲は、深く息をついた。

* * *

日が暮れた後、診察室の明かりが落ちた。

巡は祖母のノートを開いた。あるページの隅に、祖母はこう書いていた。

「重い土の下の種を見つけたら、水をやれ。光を当てよ。種は自分の力で芽を出す。我らにできるのは、土を柔らかくすることだけ。芽を引っ張り出すことは、してはならぬ」

巡は自分の手を見た。精神科医として患者の心に触れてきた手。スタートアップの契約書にサインした手。裏切りに打ちひしがれた手。今はペンを握り、他人の運命の構造を読み解こうとする手。

窓の外に、四月の夜が広がっていた。桜の花弁は、もう散りきっていた。地面に散った花弁の下で、土は静かに、次の季節のための養分を蓄えている。

巡もまた、土の下の種だった時間があった。だがまだ、丙火の輝きは取り戻せていない。太陽は、まだ雲の向こうにいる。

第二話 天中殺は罰ではなく

開業から二週間目の金曜日。

朝のメールに、一通のメッセージが届いていた。高橋美咲
からだ。

「昨日、上司に相談してみました。配置転換をお願いしたいと。
結果は来週だけど、少し呼吸ができる気がします。ありがとうございます」

巡は、それを読みながら、静かに息をついた。最初の患者
からの、最初の反応だった。

午後三時、次の患者の時間。

扉の音は、それまでとは違っていた。重かった。引き摺ら
れるような足取りだった。

村田健一は、診察室に入ると、深い溜め息をついた。四十六歳。顔色は悪く、目が充血している。酒の匂いが、微かに漂つ
ていた。巡は精神科医の目で、その身体の状態を読んでいた。

「村田健一です」

声に、かすれがあった。

「いらっしゃいませ。九条と申します。どのようなご相談で」

「あの——もう、何もうまくいかなくて。自分のせいなのか、運命のせいなのか。それだけ知りたくて来ました」

「生年月日を教えていただけますか」

「1980年5月6日です」

巡は手帳に記した。庚申年。辛巳月。己卯日。日干は己。陰の土。田畠の土、養分を含む大地。

十大主星——調舒星、鳳閣星、石門星が二つ、牽牛星。十二大従星は天恍星の七点、天将星の十二点、天胡星の四点。

天将星——十二点。最大のエネルギーを持つ星。この男には、燃やすべき力がある。だが今、その力は行き場を失っている。

「何があったのか、聞かせていただけますか」

村田は、長い沈黙の後、ぽつりぽつりと話し始めた。

「大学の同期と、IT会社を立ち上げたんです。俺がCTO、あいつが営業担当。最初はうまくいっていた。十年以上、一緒にやって、年商二億を超えた」

声が低くなった。

「それが——あいつが会社の金を使い込んでいた。問い合わせたら、逆ギレして。最後には、顧客リストを持ち出して独立されました。クライアントの八割を持っていかれた」

巡の胸の奥で、何かが疼いた。共同経営者に裏切られた男。その痛みは、巡自身が知っているものだった。

「会社を畠みました。離婚もしました。今は実家で、父親の介護をしながら、日雇いの仕事をしています」

村田の手が震えていた。

「もう何も残ってないんです」

巡は、何も言わずに、村田の話を聞いていた。

裏切り。喪失。孤独。——その全てを、巡もまた経験していた。慧という名の男に。だが今は、村田の前にいる。この男の運命の構造を読む。

「村田さんの日干は己。田畠の土です。養分を含む、育てる土。そして天将星——十二点。最大のエネルギーを持つ命式です。本来のあなたは、非常に力のある人間です」

村田が顔を上げた。

「あなたの命式には、石門星が二つあります。これは、人との繋がりを大切にする星です。あなたが共同経営者を信じたのは、弱

さではなく、石門星の本質です。人を信じる力。それは才能なのです」

巡は、祖母の言葉を思い出していた。

巡が小学校四年生の頃。京都の古い家で。さくらが庭の土を巡に見せた。冬の庭の、掘り返された赤茶けた土。その中に、白い根の束が、静かに眠っていた。

「巡、見てみ。この土」

「何もないよ」

「今な、冬や。地上は枯れてるけど、この下ではな、根が眠ってるんや。根が眠ってる時間いうのが、一番大事な時間やで」

さくらは、土をさらに掘った。

「天中殺いう時間があるんや。大地が眠る時間。眠ってる土はな、一番栄養を蓄えとるんやで。わかるか？ 人間もおんなじ。何もできない時間いうのが、一番、内側が育つ時間なんや」

* * *

巡は、ゆっくりと言った。

「村田さん。天中殺というものをご存じですか」

「ネットで少し——運が悪い時期だと」

「それは、表面的な理解です。天中殺は罰ではありません。十二年周期で、誰にでも訪れる時間です。その間、新しく始めたことは根付きにくい。投資をしても、実を結びにくい。だからと言って、悪い時期ではない」

巡は、机の上の祖母のノートを指した。

「天中殺は、大地が栄養を蓄える時間です。あなたがここ数年で失ったもの——会社、金銭、信頼。全て、一見すると失敗に見えます。ですが、その間にあなたの内側は育っていたはずです」

村田の目が、わずかに光った。

「父親の介護。あなたは、それを義務だと思っていますか」

「親の面倒を見るのは——」

「それは、天中殺の最も深い過ごし方です。自分の欲望ではなく、目の前の人間を支える。それが根を張る行為です」

「天中殺が終わったとき、あなたの土壤は、今とは全く違ったものになっているはずです」

村田は、静かに頷いた。頬を、涙が伝っていた。

* * *

診察が終わり、村田が去った後。

巡は、椅子に深く腰を下ろした。

今日の患者の話は、自分の過去を映す鏡のようだった。共同経営者に裏切られた男。巡もまた、慧に裏切られた。

—慧は今、どこで何をしているのだろう。

その問いを、巡はすぐに振り払った。今は、患者のことだけを考える。それが、運命診断師としての最初の規律だ。

窓の外では、四月の雨が降り始めていた。雨は、地に落ちて、根を育てる。

第三話 箱の外の龍

四月下旬。新緑の季節。

診察室の窓から、向かいの古い家の屋根に映る若葉の影が見える。どれほどの年月が、この風景に積もっているのか。

午後四時。

入ってきたのは、母子だった。

森川真紀は四十三歳。紺のワンピースに、きちんと整えた髪。姿勢が真っ直ぐで、言葉が簡潔な女性だった。日干は庚——陽の金。鋼鉄。

その後ろに、森川陽菜がいた。十五歳。パーカーのフードを深く被り、スマートフォンから目を離さない。だが、その指の動きだけが、激しく命を宿していた。

「よろしくお願ひします」

真紀が、机の向こう側で深く頭を下げた。陽菜は、一度も顔を上げなかつた。

「どのようなご相談ですか」

「娘が——学校に行かなくなつたんです。もう二年になります。理由を聞いても、何も言わなくて」

巡は、陽菜を見た。フードの中の顔は見えない。スマホの光だけが、その頬を照らしている。

「お二人の生年月日をお聞きしてもよろしいですか」

真紀が答えた。「私は1983年1月12日です。娘は2010年6月23日です」

巡は手帳に記した。

真紀——癸亥年、乙丑月、庚子日。日干は庚。鋼鉄。エネルギーは低い。十一点。

陽菜——庚寅年、壬午月、甲辰日。日干は甲。大樹。

数理法でエネルギーを計算すると、陽菜の値は極めて高かった。五行の内訳は、土が八十三、木が六十六、火が五十二、水が二十六、金が十四。合計二百四十一点。

一方、母真紀の命式は、エネルギーの低い星が並ぶ。天胡星の四点、天庫星の五点、天極星の二点。圧倒的にエネルギーの高い娘と、低い母。この落差が、そのまま親子のすれ違いを映していた。

そして、巡の目が、命式の構造の核心を捉えた。

庚金の母と、甲木の娘。金剣木——鋼鉄の斧が、大樹を切る関係。

「陽菜さん、少し聞かせていただいてもいいですか」

陽菜は返事をしなかった。

「学校に行きたくない理由を」

沈黙。

真紀が焦るように身を乗り出した。「この子は元々成績も良くて——」

「お母さんは、少しだけ黙っていてください」

陽菜が、初めて口を開いた。声は小さく、だが冷たかった。

巡は母に小さく頭を下げ、陽菜に向き直った。

「どうしたいの？」

陽菜がフードを少し上げた。十五歳の、どこか時間が止まつたような顔だった。

「わかりません。何をしたいのか、わからなくて。学校では、やることが決まってて。家では母が言うことをしないといけなくて。何もかもが、箱みたいで」

「呼吸できない」

巡が、言葉を継いだ。

陽菜が、頷いた。

巡は、祖母の言葉を思い出していた。

巡が八歳の頃。さくらが京都の古い家の縁側で、桜の大木を指した。根が石垣を割り、枝が屋根を突き抜けそうに伸びている。

「巡、あの木な、龍みたいやろ」

「龍？」

「甲木いうのはな、龍の木や。まっすぐ上に伸びるしかない木やで。こういう木をな、小さい籠に入れたらどうなると思う？」

「籠が壊れる？」

さくらは笑った。

「そうや。龍は籠に入りきらんのよ。でもな、籠を壊して出てきた龍は、暴れるだけや。大事なのは、根を張ることや。根を張りながら翼を広げる。そうすれば、龍はどこへでも飛べるんやで」

* * *

巡は、陽菜の目を見た。

「陽菜さん。あなたの日干は甲木。龍の木です。まっすぐ上に伸びるしかない木。エネルギーも非常に高い。学校という箱。家という箱。あなたには、小さすぎるんです」

陽菜が、初めて巡の顔を真っ直ぐに見た。

「不登校は、逃げではありません。呼吸です。箱の中では息ができないから、自分で空間を作った。それは弱さではなく、龍としての本質です」

巡は真紀に向き直った。

「お母さんの命式は庚。鋼鉄です。その鋼鉄が、甲の大樹を剋しています。金が木を切る——金剋木という関係です。『こうあるべき』『こうしなさい』という思いが、娘さんを傷つけています」

真紀の顔が硬くなった。

「でも、このままでは——」

「このままでは何ですか。世間体ですか。それとも、娘さんの幸福ですか」

沈黙が、診察室を満たした。

「陽菜さんには龍高星があります。誰も見たことのない景色を見る星です。通常の進路ではなく、自分だけの道を歩む力を持っている。斧で大樹を切るのではなく、水をやってほしいのです。お母さんの庚金の鋼鉄を、少しだけ、水に変えてあげてください」

帰り際、陽菜は椅子から立つと、小さく頭を下げた。

「ありがとうございます」

その声は、朝の冷たさを失い、柔らかなものだった。

* * *

母子が去った後。

巡は診察室に一人、窓の外の新緑を見ていた。

携帯電話が鳴った。非通知の着信。

呼び出し音が四回鳴り、巡はボタンを押した。

「もしもし」

声がした。四年間、聞いていない声だった。

「久しぶりだな、巡」

藤堂慧。

巡は口を開いたが、言葉は出なかった。十五秒後、通話は切れた。

診察室は、再び沈黙に包まれた。

巡は、両手を見つめた。丙火。太陽。だが今、その炎は揺らいでいた。

第四話 五つの器

四月下旬。雨上がりの午後。

空気には湿り気が残り、路地裏の石畳が光っている。梅雨にはまだ早いが、この季節の東京は、雨と晴れの間を行き来する。

午後三時半。

田中健太が入ってきた。三十二歳。SIer企業のシステムエンジニア。姿勢は硬く、椅子に座ると両手を膝の上に正確に置いた。眼鏡の奥の目は鋭く、それでいてどこか疲弊していた。

「どのようなご相談で」

「ミスを許せない自分を、直したいんです」

田中は簡潔に言った。

「部下が次々と辞めていきます。理由は『上司のやり方についていけない』。彼女にも振られました。『一緒にいると息が詰まる』と。最近は、眠れなくて。毎晩三時間くらいしか」

巡は生年月日を聞いた。1994年2月11日。甲戌年、丙寅月、戊辰日。

日干は戊。陽の土。山。岩盤。

龍高星が二つ、車騎星、調舒星、牽牛星。知識欲と正義感。完璧性を求める精神。

巡は、机の上にペンで五つの円を描いた。

「五行という考え方があります。木、火、土、金、水。全ての現象は、この五つの要素で説明できます。人間の心も、この五つの器で成り立っています」

巡は一つ一つの円に説明を書き加えた。

「木は成長と柔軟性。火は情熱と直感。土は安定と信頼。金は理性と秩序。水は流動性と許容。あなたの命式は——」

巡は、土の円を大きく描いた。

「土が非常に強い。山です。安定。秩序。完璧性。ですが——」

水の円の上に、小さく×を付けた。

「水が足りない。流動性、柔軟性、許容の力。水がなければ、土は固まります。どんなに小さな不完全も、許すことができなくなる」

田中が、少し身じろぎした。

「部下が『ついていけない』と言ったのは、あなたが厳しいからではなく、水を失っているからです。完璧を目指すことが問題なのではない。不完全を許す水の器が枯れていることが問題なのです」

巡は、水の円を描き直した。

「完璧を手放す必要はありません。ただ、不完全を許す水を育ててください。部下のミスを指摘する前に、一呼吸置く。彼女が何かを忘れてても、まず受け止める。それが水です」

「それは——簡単では」

「ええ。あなたの人生は完璧性で支えられてきた。それを少しだけ緩めることは、自分が崩壊するような感覚を覚えるかもしれません。ですが、その先に本当の強さがあります。不完全な相手を支える力です」

田中は長く沈黙し、やがて深く頭を下げた。

「考えてみます」

* * *

田中が去った後。

巡は祖母のノートを開いた。五行のページ。古い紙に、さくらの筆跡が並んでいる。

あるページに、目が止まった。

「完璧な人間は、誰も救えへん。不完全やからこそ、他者の不完全を分かってやれるんやで。土の医者よ。時には、泥のように柔らかくあることを学べ」

巡の中に、さくらの声が蘇った。

巡が中学生の頃だった。テストで満点を逃し、悔しがつていた巡に、さくらは静かに言った。

「巡、お前は土の気が強い子やで。完璧を求めるのは、お前の性やし、悪いことやない。でもな——」

さくらは巡の頭をそっと撫でた。

「土いうのはな、固い岩だけやない。泥もまた土や。泥は柔らかい。なんでも受け止める。お前が医者になるなら、泥のような柔らかさも持ちなさい。土の医者よ。時には、泥のように柔らかくあることを学べ」

巡は、ノートの文字を指でなぞった。

—田中健太に言った言葉は、そのまま自分に返ってくる。完璧を求めた精神科医。完璧な技術で医療をプラットフォーム化しようとした起業家。その完璧性が、どれほど多くのものを失わせたか。

その時、待合室から声がした。

「先生、いますか」

高橋美咲だった。二度目の来院。

巡は立ち上がって迎えた。

美咲の表情は、前回とは違っていた。まだ疲れはあるが、目の奥に、小さな光がある。

「配置転換、決まりました。総務部です。数字の世界じゃなくて、人と向き合う部署に」

「良かった」

巡は言った。

「で、今日は報告だけですか」

「はい。ただ——嬉しくて。誰かに言いたくて」

美咲は照れたように笑った。その笑顔の中に、巡は乙木の芽が少しだけ土の上に顔を出したのを見た気がした。

窓の外では、雨上がりの空に、薄い虹が架かっていた。

第五話 眠る大地の約束

開業から一ヶ月が経った。五月。梅雨の前の、晴れた日。

路地裏の木造建物に、初夏の光が差し込んでいる。窓を開けると、どこかの庭のジャスミンの香りが流れてくる。

午後二時。

佐藤雅人が入ってきた。三十八歳。大手メーカーの営業部長。最年少昇進の記録を持つ男だ。スーツは隙がなく、革靴は磨かれ、全身から有能さが放たれていた。だが、その目の奥に、成功した者だけが持つ不可解な焦りがあった。

「はじめまして。佐藤雅人です」

「どのようなきっかけでここを？」

「ネットで先生のことを見つけまして」

巡は、少し驚いた。

「ネットで？」

「はい。算命学の——なんというか、誰かが先生の診察の感想を書いていて。それで興味を持って」

巡は首を傾げた。自分はSNSをやっていない。ホームページもない。誰が、どこに書いたのだろう。

その疑問を飲み込んで、巡は聞いた。

「ご相談は」

「転職を考えています。今の会社が嫌なわけじゃない。でも外資系からの誘いがあって。ただ、何か引っかかるんです。今動くべきなのか、待つべきなのか」

生年月日。1988年1月18日。戊辰年、乙丑月、壬申日。

日干は壬。陽の水。大河。

車騎星が二つ。行動力の塊。壬水は常に流れていたい水だ。止まることが最も苦手。

だが、命式の中に、巡は時期のリズムを読み取った。

「佐藤さん。今のあなたは、天中殺の時期にあります」

「天中殺——」

「全ての人間が、十二年周期で経験する時間です。地表の活動が制限される時期。新しく始めたことが根付きにくい」

巡は祖母のノートを開いた。

「天中殺は『冬』です。冬に種を蒔いても、芽は出ません。ですが冬は、大地を深く耕す季節です。行動よりも、学びの時」

巡は佐藤の目を見た。

「あなたが感じる『引っかかり』は、直感です。壬水の人間は、本能で流れを読む力がある。今は動く時期ではない。天中殺が明けるまで、今の会社で自分を深く耕してください。新しい技術を学ぶ。人間関係を育てる。そうした時間に使いなさい」

佐藤は深く息をつき、やがて穏やかに頷いた。

「ありがとうございます。なんとなく、そうじやないかと思ってたんです。ただ、誰かに言ってもらいたかった」

* * *

佐藤が去った後、少し間を置いて、待合室から声がした。

「先生、いますか」

高橋美咲だった。三度目の来院。

「あの——質問があつて」

美咲はやや緊張した面持ちで椅子に座った。

「さっきの方に話されていた——天中殺って、何ですか」

巡は椅子に座り直した。

「天中殺は、算命学の中で最も基本的な概念の一つです。全ての人間が持っています。十二の干支の中で、自分に当てはまる二つの干支が空位になる——つまり、天からの支えが途切れる時期のことです」

「全ての人が、持っているんですか」

「はい。種類が違うだけです。あなたの場合は——寅卯天中殺です」

美咲が息を呑んだ。

「寅と卯は、木の根本に当たる場所です。つまり、あなたの精神的な基盤——自分自身の居場所や支柱が、生まれつき搖らぎやすい構造にある。だからこそ、あなたはずっと居場所を探し続けてきた」

美咲は、静かに聞いていた。その聞き方は、前回までとは違っていた。

「ですがそれは欠点ではありません。与えられた土壌に根を下ろすのではなく、自分で居場所を選び、耕す力がある。乙木は蔓草です。しなやかに、どこへでも伸びていける」

美咲の目が潤んだ。

「わたし、ずっと、ここじゃないって思ってたんです。でも——それが、わたしの性質だったんですね」

巡は頷いた。

「知ることは、力です。自分の構造を知れば、闇雲に探さなくて済む」

美咲はスマートフォンを取り出し、何かをメモし始めた。

その目は、前回よりもずっと明るかった。

* * *

日が暮れた後。

巡は診察室に一人、祖母のノートを開いていた。

開業から一ヶ月。五人の患者。五つの命式。五つの物語。

佐藤雅人が「ネットで見つけた」と言った言葉が、まだ
引っかかっていた。誰が、どこに書いたのだろう。巡はSNSに疎
い。自分の名前を検索することすら思いつかなかつた。

祖母のノートの最後のページに、さくらはこう書いてい
た。

「巡へ。この学びを受け継ぐ時、お前はきっと自分の弱さに気づ
くだろう。お前が丙火で太陽であるなら、光を放つだけでなく、
暗闇を受け入れることも学びなさい。やがて、本当の光の季節が
来た時、お前は目覚めるだろう」

窓の外では、五月の夜風が、木々の若葉を揺らしていた。

巡もまた、まだ眠る大地の中にいる。だがその眠りは、終
わりに向かっているのかもしれない。

第六話 大樹の孤独

五月上旬。新緑の季節が本格化する直前。

窓の外の古い屋根に、若葉の影が揺れている。空気はまだ軽く、梅雨の湿度はない。初夏の手前の、最も清澄な季節だ。この日は土曜日だった。

待合室に、高橋美咲がいた。膝の上に、古い一冊の本を開いている。さくらの蔵書の一つ——『算命学概論』と表紙に書かれた、もう何十年も前の出版物だ。巡が開業時に、祖母の蔵から持ち出した数冊のうちの一つだった。

美咲は前回の来院時、書棚に並ぶ古い本に興味を示していた。「読んでもいいですか」と聞かれ、巡は「どうぞ」と答えた。以来、美咲は土曜日の午後に来て、待合室で本を読むようになった。平日は広告代理店で仕事をしている。

午後二時。扉が開いた。

大林拓也は、三十四歳。同年代にしては、疲労の色が深い男だった。建設会社の社長。スーツは高級だが、その着こなしには余裕がない。肩は張り、背中は微かに丸まっている。

「大林です。よろしくお願いします」

「どのようなご相談で」

「嫁にも、子供にも、顔向けできなくて」

大林は、その一言を吐き出すと、しばらく黙った。

「家族のために働いているんです。会社を大きくして、子供に良い教育を受けさせたくて。でも——妻は『あなたはもう家にいな人なんだ』と言いました。長女は四歳なんですが、先日、『パパ、明日もお仕事？』と聞かれて。言葉が出なかった」

巡は生年月日を聞いた。1992年2月8日。壬申年、壬寅月、甲寅日。

日干は甲。陽の木。大樹。

龍高星が二つ。禄存星が三つ。天馳星の一点と天禄星の十一点が並ぶ。

巡の目が、命式の核心を捉えた。禄存星が三つ——愛情の星がこれほど多いのに、家庭に時間を割いていない。

「大林さんの日干は甲。大樹です。天を目指して、まっすぐに伸びる木。経営者として事業を拡大したいという欲求は、あなたの本質から来ています」

大林が頷いた。

「ですが、あなたの命式には、禄存星が三つもある。これは愛情の星です。家族との絆。親密な関係。その価値を深く重視する命

式です。あなたが感じている『顔向けできない』という痛みは、甲木と禄存星の矛盾から来ています」

巡は、静かに言った。

「天に届く大樹は、地中に同じだけの根を張っています。枝が伸びれば伸びるほど、根も深く広がる。枝だけが伸びて根が追いつかなければ——大樹は、折れます」

大林の手が、机の上で握られた。

「あなたが今すべきことは、事業の拡大ではありません。根を張り直すことです。子供と食事をする。妻と話す。それは、仕事を犠牲にすることではない。大樹が長く立ち続けるための、最も本質的な行為です」

大林の目から、涙が落ちた。

「帰ったら、娘に——」

「はい。帰ってください」

* * *

大林が去った後。

待合室で本を読んでいた美咲が、顔を上げた。大林の背中が階段を降りていくのを見て、何か考えるような表情をしていた。

「先生」

「はい」

「甲木って——すごく大きな木なんですね。わたしの乙とは違う」

美咲は、患者の具体的な相談内容を聞いたわけではない。

大林が泣いていたことも、家庭の話も知らない。ただ、先ほど読んでいた本の中に、甲木の説明があった。

巡は頷いた。

「甲は陽の木。大樹。まっすぐ上に伸びる。乙は陰の木。蔓草。横に広がり、周囲に絡みながら伸びる。同じ木でも、性質が全く違います」

「わたしは蔓草」

「そうです。蔓草は自分一人では立てません。でも、他の何かに絡みつきながら、どこまでも伸びていける。それは弱さではなく、柔軟性です」

美咲は、また本に目を落とした。だが、その読み方は以前とは違っていた。より深く、文字の裏にあるものを探すように。

窓の外では、五月の新緑が、光の中で揺れていた。

第七話　若草の問い

五月中旬。緑の深さが増す季節。

路地裏の古い木造建物にも、薦が少しづつ壁を這い上がり始めている。自然は、人間の都合を待たない。

午後三時。

草野千穂は、診察室に入ってきた時、沈んだ空気をまとっていた。二十九歳。髪は無造作に束ねられ、服装にも構う余裕がない様子だった。

「草野千穂です。イラストレーターを——していました」

「していました、ですか」

「はい。半年前から、何も描けなくなって」

巡は、黙って聞いた。

千穂はしばらく口を開けなかつた。やがて、ぱつりぱつりと話し始めた。

「SNSで作品を上げていたんです。あるとき、バズりました。四十いいね。出版社からも声が掛かって。それが——二日後、『パクリだ』というコメントが付いたんです」

千穂の声が震えた。

「元ネタがあるって。十年前の映画のシーンに似ていると。無意識だったんです。でも、炎上しました。二日で全部消えました。いいねも、フォロワーも、出版社の話も。それから半年、何も描けなくて」

千穂は膝の上で手を握りしめていた。

「自分の値打ちが、わからなくなつたんです」

巡は生年月日を聞いた。1997年2月22日。丁丑年、壬寅月、乙未日。

日干は乙。陰の木。若草。

鳳閣星——表現力の星。玉堂星——知恵と学びの星。天将星は十二点。内に秘めたエネルギーは最大級。

巡は、祖母の言葉を思い出していた。

巡が十四歳の頃。京都の古い家の座敷で、さくらが一枚の墨絵を巡に見せた。牛を探す修行者の絵だった。

「巡、牛を探す話を知つとるか？」

「知らない」

「十牛図いうてな、禅の物語や。ある修行者がな、牛を探す旅に出るんよ」

さくらは、一枚一枚、絵をめくった。

「最初は、牛がどこにおるか分からへん。山を越え、谷を渡り、必死に探し回る。やっと足跡を見つける。遠くに牛の姿が見える。やつとのことで捕まえて、手なずけて、牛に乗って家に帰る」

「それで終わり？」

「いいや。その先があるんよ。家に帰った修行者は、牛のことも自分のことも忘れてしまう。何もかもが消えて、空っぽになる。そしてな、最後に気づくんや」

さくらは微笑んだ。

「牛は最初からそこにおった、ということに。探してた自分の本質は、ずっと自分の中におったんや。探し回ったから見えんくなつただけで、最初から、ここにおったんやで」

* * *

巡は千穂の目を見た。

「千穂さん。十牛図という禅の物語を知っていますか」

千穂は首を振った。

巡は、ゆっくりと語った。

「ある修行者が、牛を探す物語です。牛は自分の本質——本当の自分の象徴です。修行者は、牛がどこにいるか分からず、必死に

探し回ります。足跡を見つけ、やっと牛を見かけ、捕まえ、手なずける。長い旅の末に、最後にたどり着く境地は——牛は最初からそこにいた、ということです。探していたものは、ずっと自分の中にあった」

千穂の目が揺れた。

「あなたは、四万のいいねを求める。出版社からの声を求める。それは全て、外からの評価です。しかし、あなたの中にある鳳閣星——表現力の星は、四万のいいねがあろうとなかろうと、あなたの中にはあります。炎上する前も、炎上した後も、今この瞬間も」

千穂の頬を、涙が伝った。

「外の評価を求めるだけではなく、自分の中の牛が見えなくなる。『いいね』の数は牛ではありません。牛は、あなたが描きたいと思う衝動そのものです。それは、誰にも奪えない」

千穂は泣いていた。静かな、だが深い泣きだった。

「明日、描いてください。誰にも見せずに。自分のためだけに。その時、気づくはずです。牛は最初からそこにいたと」

* * *

千穂が去った後。

待合室の隅で、美咲が本を閉じていた。土曜日。今日も来ていたのだ。

「先生」

「はい」

「わたしも乙木ですよね」

「そうです」

「あの方も——乙木でした？」

巡は、患者の情報を直接は答えなかつた。だが美咲の目に
は、何か通じるものがあつたのだろう。

「同じ木でも、土壤が違えば育ち方が違います。あなたはあなたの根を張ればいい」

美咲は頷いた。その目に、何かを決めたような光があつた。

第八話 太陽の裏側

五月下旬。梅雨が本格化する前の、蒸した午後。

空気が重い。雲が低く垂れ込めてる。こういう日は、人間の内側も湿っている。

日向陽一は、診察室に入ると、完璧な笑顔を見せた。四十歳。カリスマ塾講師。その笑顔は、教室の中で何千人の生徒を引きつけてきたものだ。だが、巡はその笑顔の裏にある疲労を見逃さなかった。目の奥に、光が届いていない。

「日向陽一です。よろしくお願ひします」

「どのようなご相談で」

笑顔が、わずかに揺らいた。

「みんなのために頑張ることに、少し疲れてしましました」

巡は生年月日を聞いた。1985年9月24日。乙丑年、乙酉月、丙寅日。

日干は丙。陽の火。太陽。

丙寅——。巡の手が止まった。自分と同じ日柱だ。

玉堂星が二つ。調舒星。龍高星。司禄星。天極星は二点——エネルギーの最低地点。

「教室では、毎日、笑顔を絶やしません」

陽一は、まだ笑顔を保とうとしていた。

「生徒たちは、その笑顔を見て勇気をもらうと言つてくれます。

親御さんからも感謝されます。でも——」

笑顔が消えた。

「三年前に離婚しました。妻に言われたんです。『あなたは、本当に必要な家族の前では、疲れ切って笑顔を見せられないのね』と」

巡は、その言葉を受け止めた。

教室では太陽。家では闇。外で輝けば輝くほど、内側のエネルギーが枯渇する。天極星の二点——それがこの男の構造だった。

「陽一さん。あなたの日干は丙。太陽です。実は——私も同じ丙寅の日柱を持っています」

陽一が目を見開いた。

「太陽は万物を照らします。だから周囲は明るい。ですが、太陽自身は——自分の光を見ることができない。自分がどんな輝きをしているか、知ることができないんです」

巡は、自分自身に言い聞かせるように続けた。

「太陽が自分を知るためには、月が要ります。月は太陽の光を反射して、太陽に返す。それによって初めて、太陽は自分の存在を確認できる」

「月——」

「あなたに必要なのは、月の時間です。光を放つのではなく、光を受け取る時間。具体的に言えば——」

巡は、言葉を選んだ。

「週に一度、誰のためでもない、自分だけの時間を作ってください。一人で映画を観る。目的のない散歩をする。カフェで何もせずにぼうつとする。そういう時間です。生徒のためでも、親御さんのためでもない。あなた自身のためだけの時間」

「でも、そんな時間を作つたら、生徒が——」

「太陽が沈まなければ、地球は灼熱の砂漠になります。夜があるから、大地は休める。あなたが夜を持つことは、周囲を裏切ることではありません。太陽が長く輝き続けるための、必要な循環です」

陽一は長く沈黙した。

「疲れました。本当に」

「ええ。だから、まず休んでください」

* * *

陽一が去った後。

待合室の隅に、美咲がいた。今日は土曜日ではなく平日だった。「早退しました」とだけ言った。さくらの古い本を膝に載せたまま、巡の方を見ていた。

「先生」

「はい」

「さっきの方——先生と同じ日柱だって言ってましたよね」

巡は答えなかつた。

「先生も、同じなんですね。太陽で、自分を照らせない」

巡は、美咲を見た。この女性は、鋭い。乙木の蔓草は、絡みつく相手の形を正確に知る。

「そうかもしれません」

それだけ答えて、巡は診察室に戻つた。

窓の外で、五月の雲が低く流れている。太陽は、まだ雲の向こうにいた。

第九話 蟬燭の守り手

六月上旬。梅雨が本格化した季節。

雨が、路地裏の石畳を叩いている。診察室の窓ガラスに、水滴が筋を作つて流れしていく。

灯里奈々は、診察室に入ると、その疲労は言葉を超えていた。二十五歳。保育士。体重は明らかに落ちており、頬は窪み、目の周りに深い影がある。

「灯里奈々です。保育士をしています」

声は、かすれていた。

「どのような状態ですか」

「園児たちが好きで。毎日、全力で接しています。手作りの教材も、毎朝五時に起きて作っています。でも最近——朝、起きることができなくて。体が動かないんです」

奈々の手が、わずかに震えていた。

「火が消えそうです」

巡は、その言葉の中に、この女性の本質を聞いた。

生年月日。2000年8月7日。庚辰年、癸未月、丁酉日。

日干は丁。陰の火。蟬燭。

「奈々さんの日干は丁。蠅燭の火です。太陽のような丙火とは違って、丁火は小さな火。でも、周囲を優しく照らす力があります。園児たちに全力で向き合えるのは、あなたの丁火が本物だからです」

奈々は、微かに頷いた。

「ですが、蠅燭には決定的な弱さがあります。風に弱い。どんなに小さな風でも、蠅燭の火は揺らぎます。消えることもある」

「風——」

「保護者からのクレーム。園長の期待。同僚との関係。それが風です。あなたは園児のために燃え続けようとしている。でも、誰もあなたの風除けになっていない」

奈々の涙が、頬を伝った。

「蠅燭は自分一人では自分を守れません。風除けが要るのです。それは、上司であったり、同僚であったり、家族であったり。でも最も大切なのは——あなた自身が、自分を守ることです」

「でも、休んだら、子どもたちが——」

「蠅燭が燃え尽きたら、子どもたちは暗闇の中に取り残されます。あなたが長く灯り続けるためには、風除けの中に身を置く時間が必要です。休むことは、逃げではありません。灯りを守る行為です」

奈々は、静かに、深く頷いた。

* * *

奈々が去った後。

巡は、椅子にもたれた。

ふと、佐藤雅人の言葉が蘇った。「ネットで先生のことを見つけて」。その後も、何人かの患者が似たようなことを言っていた。

巡は、スマートフォンを取り出した。普段、SNSを見ることはない。だが、気になって「算命学 運命診断」と検索してみた。

いくつかの一般的な記事に混じって、一つのアカウントが目に入った。

投稿には、算命学の用語が平易に、しかし正確に解説されていた。五行の説明。十大主星の特徴。「乙木は蔓草——しなやかさこそが最大の強み」「天中殺は冬の大地。栄養を蓄える時間」。文体は親しみやすく、画像のデザインも洗練されている。広告のプロが作ったことは明らかだった。

巡は、投稿を遡った。最初の投稿は、約一ヶ月前。開業と同じ時期だ。

そして、ある投稿に目が止まった。「先日、ある運命診断室を訪ねました。そこで初めて、自分が乙木の蔓草だと知りました」

巡は、スマートフォンを机の上に置いた。

—美咲だ。

待合室から、足音が聞こえた。美咲が、帰り支度をしている音だった。

「美咲さん」

巡は、待合室に出た。

美咲は、本を棚に戻しているところだった。巡の声に、びくりと振り返った。

「これ——あなたですか」

巡がスマートフォンの画面を見せた。

美咲の顔が、一瞬で赤くなった。

「すみません。勝手に——」

「いつから」

「先生の診察を受けた後からです。算命学を勉強して、自分なりにアウトプットしたくて。広告代理店でSNS運用をしていたので、つい——でも、先生に許可を取るべきでした。すみません」

美咲は深く頭を下げた。

巡は、しばらく黙っていた。

美咲のアカウントは、的確だった。算命学の基本を、専門用語を噛み碎いて伝えている。デザインも美しい。広告代理店で培った技術が、ここに生きている。

「美咲さん」

「はい」

「勝手にやるのは、感心しません」

美咲の顔が、さらに強張った。

「ですが——」

巡は、言葉を選んだ。

「この投稿は、正確で、分かりやすい。あなたの広告代理店での経験が、しっかり活きている。正直に言えば、助かっています。患者さんが『ネットで見た』と来てくれるのは、あなたのおかげだったんですね」

美咲の目が、大きく見開かれた。

「ただし、今後は勝手にではなく、正式に。算命学をもっと深く勉強してもらった上で、一緒にやりませんか」

美咲は、数秒間、言葉を失っていた。

「……本当に、いいんですか」

「はい。ただし——まず算命学をもっと勉強してもらわないと
ね。表面的な知識では、いつか人を傷つけます」

美咲は、深く頭を下げた。

「勉強します。絶対に」

その声には、決意があった。

* * *

美咲が帰った後、巡は祖母のノートを開いた。

蠟燭と太陽。丁火と丙火。

奈々に「風除けが要る」と言った。美咲に「正式に手伝つ
てくれ」と言った。

太陽もまた、一人では輝けない。月が要る。風除けが要
る。

巡は窓の外を見た。梅雨の雨が、大地を潤し続けている。

第十話 動かぬ山

六月上旬。梅雨の真っ只中。

朝から降り続く雨が、路地裏の排水溝を鳴らしている。こういう日は、人も街も、静かになる。

岩田剛は、診察室に入ると、その沈黙は言語を超えていた。五十歳。消防署長として三十年。一つの職務を守り続けてきた男だ。背筋は真っ直ぐで、顔は規律と責任感で刻まれている。

「岩田剛です。よろしくお願ひします」

声は低く、落ち着いていた。だが、その落ち着きの中に、微かな不安が混じっていた。

「どのようなご相談で」

岩田は、深呼吸をした。

「定年退職まで、あと七年です。三十年間、消防署という場所で生きてきました。この場所が、自分の全てだった。でも——定年後の自分が見えない。消防署という枠がなくなった時、自分が何なのか、分からなくて」

「ご家族は」

「妻がいます。子供は——長男が独立しました。消防士にはならず、大学に行って、今はIT企業に。最初は反対しましたが」

岩田は、わずかに微笑んだ。

「妻に言われました。『あなたは山よ。動かないから安心だけど、時々寂しい』と」

巡は生年月日を聞いた。1976年2月16日。丙辰年、庚寅月、戊戌日。

日干は戊。陽の土。山。

龍高星が二つ。鳳閣星。貫索星が二つ。天南星は十点。天貴星は九点。天庫星は五点。

龍高星——冒険心、未知への探求。それが二つもある。だが、貫索星も二つ。頑固。自分の生き方を変えることへの恐怖。

「岩田さん。あなたの日干は戊。山です。山は、動きません。その場所に在り続けることで、周囲の信頼を集め、大地の基盤を作ります。三十年間、同じ場所に在り続けたことは、山としての本質を全うしたということです」

岩田が頷いた。

「ですが——」

巡は、言葉を選んだ。

「動かないことと、変わらないことは違います。山は動きません。しかし山の頂には、常に雲が流れ、季節ごとに景色が変わります。冬は雪に覆われ、春は若葉に包まれ、夏は深い緑に、秋は

紅葉に染まる。山は動かなくとも、その表情は、常に変わり続けている」

岩田の目が、わずかに動いた。

「あなたの命式には、龍高星が二つあります。これは冒険心——未知への探求の星です。本来のあなたは、新しい景色を見たいと思っている。しかし、消防という職務がその欲求を三十年間、抑えてきた」

「柔道を、週に二度やっています」

「それはいつから」

「中学の頃から。三十八年」

「大会に出たことは」

「いえ。ただ、好きだから」

「それが、龍高星です。成果のためではなく、純粋な好奇心。好きだからやる。その感覚が、定年後のあなたの鍵です。柔道でも、全く別のことでも構いません。龍高星を解放してください。山は動かなくていい。ただ、山の上の景色を変えていけばいい」

岩田は長く沈黙した。やがて、深い息をついた。

「三十年間、同じ場所にいたことが、全てじゃない——ということですか」

「はい。同じ場所にいたからこそ、見える景色がある。そしてこれからは、その同じ場所で、新しい景色を作ることができます」

岩田は、ゆっくりと頷いた。

* * *

岩田が去った後。

待合室に、美咲がいた。さくらの古い本ではなく、新しい算命学の入門書を膝に載せている。先日、巡に「正式に勉強します」と言ってから、自分で買ったらしい。

「先生」

「はい」

「戌と巳の違いが、分かりました。戌は山。巳は田畠。どちらも土ですが、在り方が全く違うんですね。山は動かなくても、山のまま在ればいい」

巡は、少し驚いた。美咲の理解は、正確だった。

「その通りです」

「わたし、ちゃんと勉強します。先生の力になりたいから」

巡は頷いた。

美咲が帰った後、巡は診察室に戻り、祖母のノートを開いた。

開業から二ヶ月。十人の患者の顔を、一人ずつ思い浮かべた。

土の下の種だった美咲。酒臭い村田。フードの下の陽菜。完璧を求める田中。大河のような佐藤。根を忘れた大林。牛を探していた千穂。太陽の裏側の日向。火が消えかけた奈々。そして、動かぬ山の岩田。

十人の命式。十の物語。その全てが、巡自身の中に還ってきている。

祖母のノートのあるページに、こう書かれていた。
「診るということは、他人の運命を読むことやない。自分の運命を見つめることや。患者の中に自分を見出し、自分の中に患者を見出す。それが、本当の診察やで」

巡は、窓の外に目をやった。

梅雨の雨が、激しく降っている。雨は大地に染み込み、根を育てている。

丙火の光は、まだ雲の向こうにある。だが、雲は永遠には続かない。

巡は万年筆を取り、祖母のノートの余白に、小さく書き記した。

「十人。まだ始まったばかりだ」

窓の外では、梅雨の雨が、大地を潤し続けている。